第19回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第一九回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで三二一名の方から八〇六篇の作品をご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十一月一三日、渡辺みえこ、五十嵐勉各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

授賞式は、申し訳ございませんが、ただいま検討中です。佳作以下の賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬までに直接受賞者に発送させていただきます。

第二十回「文芸思潮」現代詩賞は、明年、これまでと同じ要領で募集を行ないます。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

第19回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

「対岸」
「干上がる鯨」「玄界灘」
河（こう）橈（じょう）（東京都世田谷区）

優秀賞

「アルベド」「誕生」「天国一丁目」
水庭まみ（神奈川県横浜市）
「絶望讃歌」「空白の青春」「命のいたずら」
十路田道広（福岡県福岡市）
「春日」「古墳」清水一美（東京都立川市）
「潜水」「砂浜と同じ熱をしている」
「島舞い」赤澤玉奈（東京都練馬区）
「五月の響き」「五月の雪」「走る『思い出』」
遠藤芳子（東京都狛江市）
「無の乱打」「しくじった奴隷」「見聞」
木戸秋波留紀（神奈川県川崎市）
「小さな街に捧げる詩」「叫びの木霊が」
「球形の表面で」森下万尋（千葉県市川市）

奨励賞

「滲む」「こころあらし」「天と地との間に」
大門真央（東京都世田谷区）
「荒野フルボディ」「スリーアイ Movable Long UKblk+UKnvy 讃頌」「082」
マッシバンバータ（大分県速水郡）
「虹」「ショッピングモール」「病室」
阿部久市（茨城県牛久市）
「新宿駅、午前二時」「きっと世界の終わり、蒼が砕け散る」
北村灰色（埼玉県和光市）
「観音様を見送る日」「夏の落とし物」「常若の器」
上木戸晃（北海道北見市）
「働哭」「追憶を超え」久利潤保（福岡県久留米市）
「審判の箱」泉水雄矢（福岡県福岡市）
「どぶから柱」「椿」「白い肌」橘いずみ（島根県出雲市）
「わったー」「風土」「空から降る声」
幸地チカソ（沖縄県中頭郡）
「憧れのマーシャラー」若林麻衣子（東京都世田谷区）
「心臓の天蓋の流動」「亡葉乃胸ーナハノムネー」
「夜露を纏いて舞う姫」曲田尚生（京都府京都市）

※次ページへ続く

選評

詩の主題と形式

渡辺みえこ

第一九回『文芸思潮』現在詩賞応募作品は、全体にレベルが高く、それぞれのテーマを持ち、そのための形式を追求している様子が窺がわれた。

詩の言葉も伝統的和歌、俳句の短詩系文学を継承してはいるが、近・現代詩は、自由であるがゆえに、著者自身が、テーマ、形式を作り上げなくてはならず、より大きな創造性が求められる。

類型的、常識的表現は、創作であるので避けなければならないが、安易な造語は独りよがりになりがちなので注意してほしい。句読点や一行の長さなども全体の統一が必要である。

詩は評論などとは違い論理では割り切れない領域を表現するため、比喩や寓話なども使われ、多義的解釈ができるようにする。そのため概念語や価値判断（美醜、善悪……）、イデオロギー的な言葉などは固定化され、意味伝達のみに狭められてしまうので使い方には注意が必要である。

最優秀賞の河橈（こうじょう）氏「対岸」は、映画のフラッシュバック技法のように鮮明な場面が展開され、非現実的な夢の言語も新鮮で生き生きしている。読者がなじみがないような方言などは注を入れたほうがより伝わりやすい。「干上がる鯨」は、シュールレアリズム的異世界のイメージにリアリティがあり、「玄界灘」は場面展開にスピード感、リズムがある。僕の夢から始まる連が六連あるが、四連目あたりをもう少し広げて展開すると、平板さがなくなり、ダイナミックになるのではないだろうか。

優秀賞の赤澤玉奈氏「潜水」は、潜水という体験が、身体で感知したものを言語化しようとしていて、水との関係を内部から観察し、映像的に展開している。「透過する血管」などの比喩が巧みだ。「砂浜と同じ熱をしている」でも溶解する「あなた」の不確かさを表現している。二連目の八行目、「知れども」は、現代語で書いているので、「知りつつ」等と文体を統一したほうがよい。

同じく優秀賞の遠藤芳子氏は、「五月の響き」「五月の雪」「走る『思い出』」三編とも、静かな中に深みがあり、存在することの悲哀が表現され、詩形も整って自己の文体ができている。

木戸秋波留紀氏「無の乱打」は若さの彷徨や熱狂が表現されているが、タイトルのような表現は生（なま）な説明になってしまいがちなので、冒頭の三行のような、現実描写で表現したほうが強さも出るのではないだろうか。「しくじった奴隷」はある状態を表現しているので寓話性、広がりが出ている。

清水一美氏は、日本語・日本文化の伝統を大事にして、表現しがたいものを柔らかい言葉の中に模索し、自己に新しい形象を与えようとしている。著者の見ている対象をもう少し具体的に表現すると、古典につながる現代詩として著者独特の世界が形作られるだろう。

水庭まみ氏「アルベド」は、「わたし」という存在の不可思議さを状況描写で表現しているのがよい。このように様々な角度から観察し表現できると思う。価値判断の言葉や、甘い情緒的な表現には注意が必要である。

十路田道広氏「絶望讃歌」は、存在の苦しさ、もどかしさが表出されている。それ故に、言語が、類型的散文的になりがちである。例えば「身の内側に負った火傷」「地の底で聞いた音」という表現を、それはどんな痛み、音だったか、私の身はどんな反応をしたか、などを細かく書き記してみて、異なった表現と並列させてみると、新しい表現を発見できることもある。

森下万尋氏は、「小さな町に捧げる詩」「叫びの木霊が」は、詩語も詩形も整っている。詩語が豊富だが、中心になるイメージ以外を少し抑えるなら、さらに明確に伝わってくる部分がある。

奨励賞の橘いずみ氏の、人間を含めた生き物が泥土のようなものからやってきて、湿気を維持し、生成と腐敗の循環の中にいることの視点は大事だ。周知の一般的知識は解説的になりがちなので、著者の感じ取った具体的な事柄を表現して読者に伝えてほしい。

奨励賞

「世界樹」「vector」　インバ（奈良県奈良市）
「身に余る人生」「自由前夜」「等身大」　実川阿仁（東京都葛飾区）
「湿り」「鉄は、骨よりも速い」「風景と皮膚」　川嵜雄司（東京都荒川区）
「抗体集団」「しおれる／ふたたび」「血縁」　今宿未悠（東京都世田谷区）
「たわむれどき」「矛盾」中村郁恵（北海道札幌市）
「いずれ、雨になる」「太陽の食卓」　徳丸魁人（愛知県安城市）
「卒業証書」「十八ごときのさみしさ」　色透　諷（東京都杉並区）
「味蕾に針」「たたかいのまえのたたかい」「もっと脳を鍛える大人のDSトレーニング」　渡辺八畳（東京都西東京市）

川嵜雄司氏は湿度というテーマで、科学的に検証していく過程に詩情を見出している。客観的記述と自己の知覚を対比させる、身体の内と外の知覚なども深めていくとよい。

徳丸魁人氏、雨や水に還っていく自然の循環には、東洋的救いのようなものも感じられる。「いずれ、雨になる」の最終二行はない方が余韻が出るのではないか。

マッシバンバータ氏、リズムや速度があり、打楽器で打ち込んだような言語の連打の響きが残る。断絶する連のつながりのある部分も三連目あたりにあると著者の意図がもっと伝わってくるのではないだろうか。

久利潤保氏は、心の中に抱えた詩情をかたちにするにふさわしい言葉を探しているのであろう。もどかしさが伝わってくる。人が現実に出逢う、感動や苦難や、悔恨や、それらにぴったりした言葉にすることは、困難な作業だ。現代詩での漢熟語は、強い意味を持つので、適切な位置に効果的に使いたい。抱えている多くの言葉を大事にして詩を書き続けていってほしい。

若林麻衣子氏は、マーシャラーになった「あなた」について共感をこめた澄んだまなざしで表現されていて、三連、四連は状況が浮かぶ。「憧れ」という言葉は、甘く情緒的に使用されることが多いので、もうすこし象徴的な表現をしたほうがよい。

今宿未悠氏「抗体集団」は、最終連に詩情が表現されている。一連二連でもう少し具体的形象が伝えられると入りやすい。行分け詩なら句読点はなく、一字明け、行変えで一呼吸置く形式にして、緊張、飛躍を出すこともできる。

幸地チカソ氏は、沖縄の側から皮肉（サタイア）の言葉にリズム、流れがあり、朗読するとよい。沖縄方言は、注があったほうが理解が深まる。

泉水雄矢氏は、異端審問のような恐怖を見つめようとしている。こんな人間の闇はどこにもある。もう少し具体性が出るとさらに説得力を増す。もう二～三編書いてほしい。

阿部久市氏、「虹」「ショッピングモール」は、詩的な要素を含んだよい着想なのでもう少し長く書いてほしい。「病室」は、現実描写と的確な箴言（アフォリズム）の秀作だ。感性をもっと深めていくとよい。

渡辺八畳氏、「味蕾に針」「たたかいのまえのたたかい」は、現実の自己批評も含めた現代文化批評詩になっている。社会の現実描写と自己の現実を並列したところがよい。

大門真央氏、「天と地との間に」は、「わたし」というものの不可知性、他者性を表現しようとしている。「あなた」をもう少し具体的、視覚的に表現するとさらに説得力が出る。「滲む」は、散文詩なのでもう少し中心に伝達可能なものを記したらさらに訴える力が強くなる。最終行の「イザヤ漢」は旧約聖書の「イザヤ書巻」のことではないだろうか。「こころあらし」は、意味は明瞭に伝達されている。

これを自己自身の大事なメモにして、これを元にして詩はいくつも書けるのではないだろうか。設定も場所もいろいろ変えて。

北村灰色氏「新宿駅、午前二時」は、第十八回の「池袋午後二時」の連作であろう。池袋も新宿もいろいろな場所があり、渋谷もまた違った部分がある。批判は固定的になるので、詩では現実描写に留めたほうがよい。十二行目の「虚無また虚無」は、いつまでも踊り続ける様子などの描写にすると、現実的虚無感が詩の形で出る。「きっと世界の終わり、蒼が砕け散る」は、言葉が豊富でリズム感、緊迫感があってよいが、具体的な場所のイメージが出るとさらに現実感が増すだろう。

中村郁恵氏は、これまで何気ない主婦の日常の中の細かいところを見つめ反転させたりする繊細な詩情を発見していた。「たわむれどき」の一連目の出だしは、夏ならば白々明けの窓の外の様子と主婦の朝が鋭く伝わってくる。こんな詩を書いた人はいままでなかったと思う。こんなことが詩になるとは思われなかったのだろう。著者の置かれている状況を見つめる詩をこれからも書いていくとよい。新聞の中に著者自身も引きずり込まれるような記事もあるはずだ。そんな格闘詩もできるのではないか。「矛盾」も状況と真摯に向き合っているよい詩だ。十五行目の空は、「から」か「そら」か、ルビがあったほうがよい。「無」の実在、ゼロを数として定義したのは古代インドだが、無とは恐ろしいことでもあり、宇宙の果てや死後は今でも未知だ。そんなことを著者は衒いなく表現している。

実川阿仁氏、生き方を模索している気持がよく表現されている。「身に余る人生」は、このような気持ちを詩の形で訴えるには、何か一つの状況の活写をしてみて、そこに象徴的に一つの問いを読者が感じるようにするとよい。後から意識で考えると回想の説明になるので。説明や意味の解説は、評論の仕事になる。「自由前夜」は、現在進行形で提出されていて実感が出ている。ことに最終連は詩的イメージの余韻が残る。

渡辺みえこ

わたなべ　みえこ

日本女子大学、文教大学など元大学講師。詩誌「いのちの籠」同人。日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。2009 第59回H氏賞詩集賞選考委員。2015 第47回横浜詩人会賞選考委員長。

詩集

『耳』詩学社 1972。『喉』思潮社 1982。『声のない部屋』思潮社 2001。『水の家系』南風プレス 2002。

『空の水没』思潮社 2013（第十回日本詩歌句大賞受賞）。

文芸評論『女のいない死の楽園―供犠の身体三島由紀夫』パンドラカンパニー刊　現代書館発売 1997（第一回女性文化賞受賞）など多数。

インバ氏、「世界樹」壮大な風景を描いているが著者自身の現実をどこかに描いたほうが対比が出る。会話「出て行け～」などは、現実的で鮮明だ。多くのイメージが出てくるが、それぞれを大事にして、いくつかの詩になるのではないか。重い意味の漢熟語は多用すると意味が薄らぐので、どこかに集中させて他は少し抑えるとよい。

上木戸晃氏、静かな祈りが響く四行詩「観音様を見送る日」は、秀作である。「夏の落とし物」は、少年の日の小石との交流、詩情が溢れている。

近代詩にはよい四行詩があるが、現代詩の口語自由詩は非定型で書かれているので、口語自由詩も書いてみてほしい。

曲田尚生氏、「心臓の天蓋の流動」は、反語や比喩が巧みである。言葉とイメージが溢れていて、言葉によって韜晦と表現の欲望が鬩ぎあって、中心になる主題が伝わりにくい。中心になる主題を三、四連目ぐらいに立てて、あとは抑えたほうが伝わりやすい。「夜霧を纏いて舞う姫」は、ことに二連などは、美しい雰囲気が伝わってくる。しかし言語表現が乱舞し、イメージは拡散して雰囲気だけが残る。言葉が残るように具体性を持つ連があるとよい。

色透諷氏は、若さゆえの抵抗の視線が新鮮だ。「淋しさ」は、夏目漱石の小説『こころ』の主題で近代の個が抱えるものだが、色透氏の「自由」の持つ「不自由」さに通じる。そういう視線を深めていけるのではないだろうか。

いい作品が目白押し

五十嵐　勉

第一九回現代詩賞は、いい作品が目白押しで、レベルの高い選考になった。特に優秀賞、奨励賞の層が厚く、私が5点満点で付けた採点のうち、優秀賞レベルとする4点以上は一八名に上り、奨励賞レベルの3点以上は二十名にもなった。これは決して私の採点が甘くなったわけではなく、全体がレベルアップし、激戦となったことを表している。勢い、優秀賞に決まったのは、4・5以上くらいの高得点者に絞られる結果となったが、選考は複数で決めるため、評価の違いから、いくらかのずれが生じたことはやむを得ない。例年なら優秀賞となったものが、今年は奨励賞に甘んじることになった境界線近くの差は、結果ほど大きくない。

私が5点の満点を付けて最優秀賞に強く推したのは、河橈（じょう）氏の「対岸」「干上がる鯨」「玄界灘」である。一八歳で渡米してニューヨークに滞在し、コロンビア大学院映画演出科を卒業という特異な経歴を持つ筆者は、そのアメリカの異空間を日本語の中に取り入れて、独自の力感溢れる詩空間を形成している。英語を交えながらも、不自然ではなく、むしろ日本語の輪郭を強めて、陰影を深めることに成功している。普通は英語を挿入すると、日本語の言葉は曖昧になり、弱くなるものだが、この「干上がる鯨」は逆に輪郭を濃くしている。これは、筆者の異国での体験が、豊かで力の強い言葉の放出となるためで、日本では持つことのできないイメージや知識が熾烈さを伴うためである。実体験に基づく単語の激しさが、実質的な弾丸の貫通力を持つ。聞き慣れない異国の言葉は、即物的な実質を帯びて投げつけられる。「テキーラと硫黄が混じった空気が濡らす地下」「白目は這い回る負傷兵の血の跡で彩られたサイゴン」などという詩句は、日本の風土では生まれにくい表現である。しかしここにはリアリズムとしての言語存在がある。呻きか吠え声かわからないような擬音語に、「傷ついた神」を重ねる大胆な表現は、確かに世界を斬っている。ここまで裁断できる詩人は、現代では稀有である。

次に4・8の高得点を付けたのは、水庭まみ氏の「アルベド」「誕生」「天国一丁目」と、十路田道広氏の「絶望賛歌」「空白の青春」「命のいたずら」である。

水庭まみ氏は宇宙からの入射光という視点で、今生きている現在を照射して浮かび上がらせる新鮮な言語空間を構築している。この聞き慣れない「アルベド」という言葉は、宇宙からの入射光と反射光の比率を表しているということだが、異質さが神聖さを備えて世界を浮かび上がらせる透明感の世界は、清潔な冴えがある。また「誕生」に見られるように、「海流の誕生日」を祝ったり、星々の幽霊をその流れに見たりするスケールの大きな把捉をする視点がすがすがしい。宇宙を生命体として受け止めて、その循環の中に現在の自分の感触を得る手がやわらかく透き通っている。二十四歳という年齢を考えると、まだまだ伸びそうな気配がある。今後に期待したい。

十路田道広氏は、すでに奨励賞を四回受賞している常連と言っていい詩人だが、今回の作品には、これまでと違った気迫が感じられた。言葉の間に張り詰めたものがあり、引き絞られた弓の弦のような力の溜めがある。そして同時に流れがあり、何かに届くように詠じられる、天への飛翔がある。「叫び声よ空を貫け」など、詩唱の新たな到達を感じた。この気宇を大事にして今後も詩作していってほしい。

五十嵐　勉

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ

79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞

98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞

2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

他に中篇小説集「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院（ワットプノム）へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など

惜しくも奨励賞になったが、今宿未悠氏の「抗体集団」「しおれる／ふたたび」「血縁」は、4・7を付けた作品である。言葉のイメージの結合力が強く、それによって作られる詩空間が広く、躍動が大きい。「氾濫する存在の中に投げ出されて／埋没していける、つまりは赦される、という／その予感あるいは充足が／欲びであること」のように、言葉の飛躍が大きく、しかも緊密感を失わない。詩が言葉の飛翔とするなら、その翔ける翼の力は雄勁である。源となる怒りや反発や抗議が大きい分、その飛躍も大きくなるのだが、世界を否定する力の大きさが、美や親しみから離れていく分、色や形が失われる傾向がある。しかし作者の美点は、人の反応など気にしない、その破壊力と飛翔力にあるのだから、どんどんこの詩空間を広げていってほしい。むしろその方向と前進にこそ、神聖や清浄への到達がいつか見られそうである。期待できる。

優秀賞の赤澤玉奈氏の「潜水」「砂浜と同じ熱をしている」「島舞い」は言葉の絡まり合いに快い律動があり、紡ぎの色相の瀟洒なリズムが魅惑する。ただ、大きく見えそうで意外に小さくまとまっていく小回りの収まりが、詩の規模を結果的に小さくしている。言語感覚は優れているが、言葉の野心や詩空間への大胆な造形は感じられない。才能はあるとして、この領域で開花するのは、別な志や意気込みが必要だろう。

清水一美氏の「春日」「古墳」は久々の氏らしい静謐のなかに神々しさを表した沈着な作品で、その高雅な造形には心を洗われる。「甘翔る光儀の／白い残り香を／あおい闇に遡り／水面をたゆたう／鷺の白によせる」など、高みへ駆け上る気高い意志は、健在である。

遠藤芳子氏は、八十三歳と受賞者の中では最高齢だが、詩想はむしろいっそう旺盛で、「五月の響き」「五月の雪」「走る『思い出』」は、最愛の我が子の喪失を軸に、悲壮を詠嘆に昇華して、五月の大地の時に巡らせていく。「まっさらな／美しい死の面を／顔に貼り付けて戻ってきた」に込められたリアリティは、技巧を超えて迫ってくる。

木戸秋波留紀氏の作品は特に「見聞」がよかった。「明日、／私の命はないでしょう」という意表を突いた始まりから、虚構舞台を巡らせて「殺される」ことを背後に匂わせつつ、スリリングな劇的言葉を繋げていく。こういう演劇的な詩も可能であることを示していて、新鮮味があった。「――渚には／未来が打ち上げられていて」という終わり方もいい。

奨励賞に甘んじてもらった北村灰色氏の「きっと世界の終わり、蒼が砕け散る」は、前回に劣らない出来栄えで、むしろ冴えが感じられ、私の評価は高かった。「やがて凝灰するヴァニラと海蒼／影絵の世界は　甘美と溺死に抱かれて／お互いの蒼に浸るから」の部分など、より洗練された表現が感じられる。「新宿駅、午前二時」も前回の「池袋駅――」との連作と見られ、よく都会の裏面の影を捉えて、的確な詩想表現に形作っている。進化を感じた。

奨励賞となった大門真央の「滲む」「こころあらし」「天と地との間に」も言葉に込められた投射力の強さを感じた。直截な表現は簡明で力があり、インパクトは強い。ただ、所々に尻尾を巻くような表現があって、「センスがあるかもしれないなんて思い耽って」とか「なんて常套句を隠れ蓑にしようとも」など、せっかくの強さを逆に損ねてしまっている部分が惜しまれる。こうしたところを改善して、もっと強さやキッパリとした表現を積み重ねる方向に修練していけば、大きく開花するはずである。

以下奨励賞への感想を続けたいが、若林麻衣子氏の「憧れのマーシャラー」には、何か胸を打たれる響きがあった。「マーシャラー」は聞き慣れない言葉だが、飛行場で到着した飛行機などを、手旗で誘導する作業らしい。「パドルを手に掲げ合図を送っている」「正しい位置で停止できるよう／任務を遂行している」とあるので、その仕事が類推できる。不思議なのは、その人へ込められた思いの深さ、孤絶した存在への痛切な讃えが最後まで貫かれていることである。この悲痛なまでに寄せる思いとは何か――この祈りの舞には魅了される。

実川阿仁氏は「自由前夜」がよかった。怒りや怨みが露骨に、赤裸々に放たれている。「自由の船」に乗り、街の地獄を船出しようとするときに襲われる恐怖が翼への痛みに変わる最後はクライマックスとしていっそう高揚している。このダイナミックな勇躍フィナーレは素晴らしい。

まだ高校生の色透諷氏「卒業証書」「十八のごときさみしさ」には、切れ味の鋭い刃がある。しかもそれを畳みかけて一つの塔を打ち立てるような樹立造形には、確かな詩才がある。高校生で奨励賞を受賞したのはおそらく初めてと思う。鮮烈な切り込みを繋げながら、長い造形、長い流れを盛り上げ奏でる力も豊かで、反発に裏付けられた弾力が快い詩空間を紡いでいく。今後が楽しみである。

マッシバンバータ氏は、ペンネームを変えての登場で「荒野フルボディ」など力感は増して、前進しているが、他の作品が英語に頼りすぎて、違和感を滲ませていることや、ペンネームを変える必要がどこにあるのか、必然性が見えないところに不満が残った。

橘いずみ氏の「どぶから柱」はタイトルに「どぶ」を持ってくるところで、大いに損をしている。透明な美観やトーンがこの言葉によって損なわれ、純正の趣が濁ってしまっている。また他の詩では所々旋律の調子が崩れて、不協和音を出している。脱皮のための滞りとも思えた。

総じて今回の現代詩賞に寄せられた作品は、それぞれの世界での鮮烈な切り結びを示して豊饒だった。現代の組織社会や科学文明の高度化、便利で表面の綺麗なヴァーチャル文化などに汚染されていない真の眼差しや感性をつぶさに見ることができた。この言葉の華が咲き誇ることは、精神の基盤を確かにし、未来を示すものであることを確信する。冒されない人間の感性の母体に触れさせてもらった。

佳作

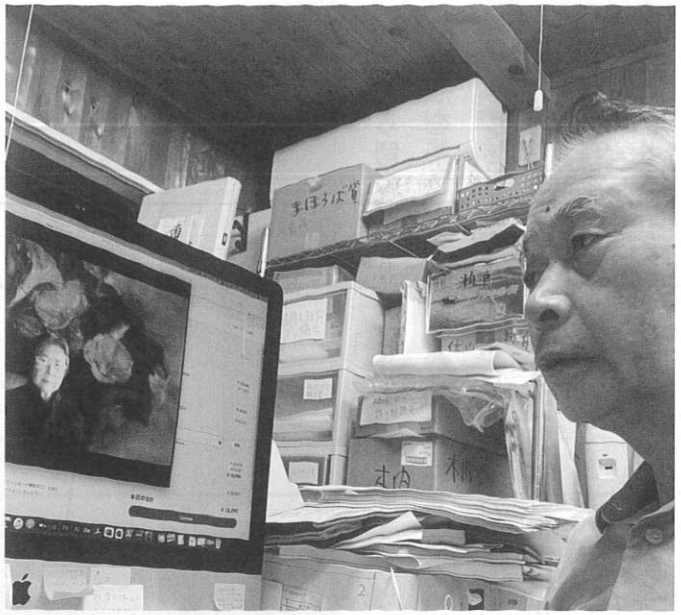
「限りのない旅」「バリの祭りは終わった」　松原泰子
「一瞬のたわむれ」　岩谷隆司
「サヨウナラ」「旗」　古宮行恵
「令和」　庄司直也
「くらげ狼」　常本哲郎
「月」「愛のことば」「道程」　有澤かおり
「電子レンジ」「愛しくて」「無駄」　黒江修一
「レイン」「展翅」「低体温」　佐藤　裕
「遊戯場への埋没」「死へ」
「花の調べ」「夜明けの月」「青葉の雫」　坂井　傑
「生きる意味」「青空に泣く」「丸く眠る」　角田和美
「硝子の天井」「宗教勧誘お断り」「墓守の鍵」　械冬弱虫
「鱗粉」「現れた母」「サーカス小屋」　北川　聖
「来し方行く末」「苛立たしい午後」「役目を果たした約束」　晴野康史
「白い花」「水の孤独」「春のひと時」　後藤　順
「四十九日」　齋藤菜摘
「花魁」「フーガの朝」「削除BC」　今井葉子
「見つめられて」「越冬」「凍結」　金子忠政
「花に尋ねる」「風の声」　片岡周子
「七十八億分の一人の螺旋階段」　A.MARE
「問」「運針」「約束」　村上文緒
「蜂」「硝子」「刃」　薬師丸怜央

「罪名」「思い出せないくらいずっと前から」　吉岡幸一
「私は生きている」
「累日」「浮世」「終宴」　キネブチタツヤ
「春の衛星」「つよがり」　街風さいか
「三百六十五連休」「幕」　はしのぶしげ
「鯨の骸」「鋼の星」「光る星」　みずぬまけいだい
「ストロベリームーン」「愛しき人へ」　永畑加代子
「祈り」
「胸の内の喫水線」「言葉についての二、三のアナーキー」「昏睡のルフラン」　舟橋空兎
「はとバスツアー」「声渡る平日」「引力」　妻咲邦香
「最果てのイマーム」「君が見ている世界」「トランスジェンダー」　レイ
「ランドスケープ」「再見」「砕かれた青いゼリーの光」　花氷
「孤独な朝に」「終焉の音」　三浦恵子
「堕天使エクスタシー（俺が愛した四人の女たち）」
「森羅万象の子どもとして」「闇を持つ者へ」　貝塚マナ
「八月のカレンダーに裏返しに挟まれた奇妙な風景写真から」「稀に起きる出来事に必ずいえること」「逃げ出したネコを飢え死にさせない方法もしくは使いこなせない解決法」　疋田あゆみ
「紅の涙」「戀」「風吹かば」　燕
「LIFE」「反芻する覚悟への独白」CONSONTED25　新里　輪
「僕の部屋」
「曲線」「泣くまえに」「生きてゆく」　優木絆名
「工場地帯」「波紋」「なるほど彼らはあたまがおかしい」　西村　洸
「池上彰」「字幕」「匂い玉」　渡部榮太
「狼の読書会」「わかれ」「クリスマスローズ」　上原翔子
「写真」「神隠し」　愛羽　文
「残響」　相河史哉
「息を吹き返す」「舞踏」「万人こそ詩人」　原氷
「高校時代」「せなか」「午前五時」　井上正行
「麒麟の背鰭」「Sustain」「かもちれんごうかい」　まほろばしじみ
「マグダラのマリア」「河川敷」「存在について」　斎藤未菜
「DEEP　END」「羞恥心」　薛沙耶伽
「星を見て、帆を上げる」「あなたが秘密をもつならば」
「ハンマーで石塊をたたく」　日下直哉
「BIRTHは虹の色をしている」「深海魚」「0地点on the earth」　keisei.hhh(stereotype2085)
「相思」「西から吹く風」「まどろみ」　春野太郎
「地獄の蓮」「堕天一夜」「天秤と軍配」　藍原知音

入選

「誰にも通じないことば」「鬼ごっこ」　中川　望
「きみは平戸のビーチへ行ったかい」　永田米吉
「スーパーマンなんかくそくらえだ！」「私のガチ恋する推しに捧げる唄」　三日月李衣
「あっけなく、カランコロン」「ビューラーのゴムでできた眉毛」「居場所」　朱泪みね
「自由帳」「ドブさらい」「心象世界」　久保慧眼
「金婚式」「春の雪」「椿と姉」　ふきのとう
「羽化せぬ蛹」「本能」「さるの子」　春町桃花
「三つの影」　天ケ谷麗
「父」「最期の対局」「情動」　中村　満
「人生はどう笑われるか」「世の中のどこかでなにか」「どこへの墓石か」　小山田良三
「しゅんしゅう」「おひめさま」　あひこみさき
「おそらは　きっと」「とんびよ　とんび」「路上にて」　いまだまりこ
「スプートニク」「柔い子供」「渇いている」　道草なずな
「雨音がこだまする」「きみに捧げる言葉」「るるる」　たいらゆきこ
「暗闇を突っ走れ」　田中浩司
「発光抄」「自動販売機」「REリミット」　裏路地ドクソ
「変電所」「デパート」「氷像」　青木夕海
「散歩」「終末」　河合麻衣
「宇宙カマド」「手品」　ワタナベモカ
「あるいは未明について」「古屋敷撤去」　後藤敏斤
「あなたが殺した」「夢」「埴輪」　小杉山立夏子
「道徳のお時間」「事情」「変わりゆく概念」　澄乍
「新人」「お金」　中原ねも
「みどりのうた」「淡い大地」「異次元」　羽鳥結人
「薔薇カヲル月ヒカル」「捧ぐ」「静かな恋」　ミキコトホ
「メロンパン」「陶器と木匣」「秘跡」　華賀　透
「記憶」「御池の上の」　あぜ
「あとがき」「痴呆人」「砂漠の唄」　烏頭九丸
「鳥の歌」　四季長明
「童影」「透明感覚」「燃え上がる秘密」　井澤禎雄
「皐月」　柊みどり
「夕立のあと」　猫柳木りさ
「夜の世界には夢の川」「中身とその熱」「おめでとうと言いたい」　蕪木さくら
「月光速」「弦界」「太陽、出づる」　千葉紫月
「春がきたら」「日向を泳いで。」「縁結び」　里中美月
「伊集の森」「器物破損」「白百合色の墓標」　琴森　戀
「ノスタルジア」「今日の独り」「行先」　暸
「げろと種」　こんどうののか
「行進曲」「誰だ」「東京」　花山徳康
「ホーム・スイート・ホーム」「化石をわたる風」「和解」　福永十津

「アキラメという感情」「立ち話から」「カラスの行水」　横井純子
「石の花」　近藤小百合
「天草の真青の海の色の中」「第六天魔王に捧ぐ愛の歌」「祈り」　青藍
「水風呂」　設楽いくこ
「山は笑う」「晩年是好日」　田村全子
「奏」　市原芙実子
「1月18日」　柏村ねお
「プレゼント」「砂の降る星……」　松岡真弓
「月下の送別」「解離、どこに落ちるのか」「髪の命数」　川咲道穂
「魚の国」「詩を産む」「夕焼けは100円で買える」　三刀月ユキ



10月30日3時より、第19回「文芸思潮」現代詩賞選考会はズームで行われた

対岸

河橈（とうじょう）

こちら側のプラットフォームでは
酒瓶を茶色の袋に隠した若者たちが
8th Avenue 行きの電車は40分後だと
この世で最も信用ならない電光掲示板にからかわれ
それなら俺たちは East River を泳いでやると
空の酒を線路に向かい投げつけていた
粉々のガラス瓶の空襲に逃げ回る鼠
になりたい
彼ら
穴だらけのセーター、430ドル、I got this second hand、精液にまみれた On the Road、
テキーラと硫黄が混じった空気が濡らす地下
耳にした話の中でのみ消費される私たちの若さは

Joh Koe

去っていった単語を漁るように散らばった
机の上のシャグ*を掃除する
コカインも嘔吐も知らない
概念上の分娩台でタップを踊る

向かいのプラットホームでは
歯の無い浮浪者が必死で叫んでいた
あいうあ　だべーぅどぉっ　う
腕を振り回す彼の肌は、彼の先祖が綿を摘むアテ*に喰ってきた数多の夜で黒かった
あいうあ　だべーぅどぉっ　う
白目は這い回る負傷兵の血の跡で彩られたサイゴン
ジミ・ヘンドリックスの爆撃機は牛耳に上がりきり、雄々しく翻した後、Qamishli の最後
の夜を照らした
あいうあ　だべーぅどぉっ　う
その落下傘は、彼が5歳の頃、売人だった兄貴がこっそり持ってきてくれた爆竹のように
明るかった

*シャグ／手巻きタバコ用に細かくカットされたタバコ葉
*アテ／肴

独立記念日、彼は大事に取っていたその爆竹に火をつけBrownsville Streetに投げつけた
2階の窓からは祖母がマルボロを吸いながら、笑っていた、あいうあ　だべーうどぉっ　う
それは翌々日、ブロンクスで撃たれて死んだ兄貴の
早い葬式だった、Qamishliの落下傘、あいうあ　だべーうどぉっ　う、Bushwickの午前
3時、浮浪者はまめ*らない舌で何度も叫んでいた
I'm a damaged god
I'm a damaged god
私は傷ついた神である

＊まめる／博多弁で舌がよく回らないこと

Joh Koe

受賞の言葉　河橈

去年の冬、祖父を看取るため、帰省しました。老人ホームの方は、たまに暴力的になるとおっしゃっていましたが、私の目の前の祖父は、優しく、温かい、決して怒らない、いつもの祖父でした。痰を取る時間になると、苦しいと嘆き、抵抗するので、筆談で説明すると、理解した様子で耐えてくれました。やっぱりお孫さんは違うねと、介護士さんは私を励まして下さいました。そんな生活が一ヶ月ほど続いたある日、いつものように痰を取る時間になり、私が抱きしめる形で祖父を抑えていると、祖父が思いっきり私を殴りました。私よりもうんと細い手でしたので、痛くはなかったのですが、私の目を見て、我に帰ると、今度は子供のように泣きながら自分を殴り始めました。詩とは何か、私にはさっぱり答えることができませんが、あの夕暮れ時の祖父は、何か詩にとても近いものがあったような気がします。この度は、本当にありがとうございました。

河橈　こうじょう

1992年生まれ
NY州Marymount Manhattan Collegeにて、演劇、舞台演出を専攻。コロンビア大学院映画演出科卒業。2015年、文芸誌『The Review』にて最優秀短編文学賞受賞。同年、短編映画『EUREKA』（監督・脚本）にて、Around Films国際映画祭審査員賞、Top Short映画祭インディペンデントドラマ最優秀賞受賞。2018年、短編映画『Secret Lives of Asians at Night』をプロデュース。全米監督協会審査賞、ボストンアジアンアメリカン映画祭最優秀短編賞等受賞。2020年、短編映画『逆流』（監督・脚本）がショートショート映画祭、タリン・ブラックナイト映画祭、CINEQUEST国際映画祭にて公式上映され、第42回クレルモン・フェラン短編国際映画Short Film MarketにてMarket Picksに選出される。ホームページ：johkoe.com

アルベド

水庭まみ

わたしの裾野に広がる見えないレースは
ことばの齟齬が生んだうつくしい孤独であり
それは何ものにも侵しがたい絶対のくつわともなり
時を重ねるごとに緻密さを増してゆく

透明な糸の反射角は入射角を超え、ことばだけではない、
歪んだイメージとなってあらたな誤解を生みだす
真綿のような
無数の繊維に包まれたみずみずしい果実は
冬の朝かがやき
恒星からの光を乱反射させ
わたしという謎に包まれた天体を
いくえにも織り重ねたオゾンでほのかにぼやかす

アルベド／天体の外部からの入射光に対する反射光の比

鏡を見てもわからない

ことばがあるかぎり
視覚があるかぎり
わたしはわたしに惑わされつづけ
きょうもまたレースを編む

水庭まみ
みずにわ　まみ
1998　茨城県水戸市生まれ
2021　日本大学芸術学部文芸学科卒業
東京都目黒区在住

受賞の言葉　水庭まみ

この度は優秀賞を頂きありがとうございます。詩を作り始めてから十数年、私にとっての詩は社会との折り合いに悩んだときの絶対的なシェルターでした。好きな言葉を詰め込んだ私だけの王国に籠れば、他人が気にならなくなり、本当の自分が輝いているような気がしました。ここ数年、会社員として働き始めてから、詩への向き合い方が変わってきています。可能であれば死ぬまで創作を続けたいです。

絶望讃歌

十路田道広

光が善で闇が悪であるような平易さに
縋り付いてばかりの日々に火がついて
勢いよく立ち昇った白と黒の煙は
呼吸すら許さないほどの烈しさで
熱を帯びて身体の内奥に染み入る

身の内側に負った火傷は
外からは手の施しようがなくて
その爛れ具合いも分からずに
甘美で幸せな思い出の出涸らしを
分泌させる他に成す術がなかった
同時に止めどなく溢れる涙の雫が
沈みかかる陽の姿を映しても
温もりは零れ落ちて弾けるばかり
いつもこうだったと俯く背中に
夜だけが優しく囁きかける

何をしようと何が起きようと
未来は誰の元にも訪れる
その残酷さを受け止めるには
きっと希望だけでは足りない
一度地の底まで落ちて行った者が
もし帰って来ることができたなら
携えているものは何だろうか

朝は殊更に眩しく
目を開けておくこともままならない
ようやく慣れてきた頃には
やたらと灰色ばかりが目につく
これが本当の景色だというのなら
今まで出会ってきた全ては
あまりにも当然に
整然と分別されていたのだ

第19回「文芸思潮」現代詩賞
優秀賞

絶望讃歌

言い知れぬ曖昧さを湛えて
未来が差し迫って来た時
手の中の痛みを伴った鼓動は
自分の一部となった

叫び声よ空を貫け
本当は何処へでも行けることを
誰かに伝えるために
泣き声よ足元を満たせ
本当は何処にでも立てることを
誰もが信じられるように

僕たちは
地の底で聞いた音を紡いで
歌を唄えるのだから

十路田道広

十路田道広
とろだ　みちひろ
1990　福岡県糸島市生まれ
福岡市在住
統合失調症・強迫性障害と闘病する傍ら、断続的に創作活動を行う
第14回～16回、18回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞

受賞の言葉

十路田道広

自分の中でその存在の大きさが時折変わりながらも、詩作はいつも共に在り続けてくれました。病身となって久しい今、詩作は心を沸き立たせてくれる数少ないものの一つとなっています。その営みを通して、溢れてやまない悲観や焦燥、恐怖等を幾度も掬い上げ、何とか生きられています。

ひと際気持ちを込めて書いた今回の作品がこのような賞を頂き、無上の喜びです。選考委員及び関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

古墳

白鷺舞い立つ
いにしえのあお
鏡なす水面に
三日月の影薄く
横顔は幽(かそ)けさ渡り

あおを澄ます末の闇
霧れる記憶の背は
はるかな水の呼(こえ)に
かえらぬときの
空白を振りかえる

広げた翼のいろは
白いく形のいのりに
神の光儀(すがた)を負う
たらちねの幾重
忘却曲線をたどり

いのちのなごりを
ひとはばたきごと
呼び交わす
妹よ　来う
背よ　来う

呼(こえ)の行く方
鎮まるいろの
水の上を深み
沈黙ののちの
あおにさそわれ

遠のおもかげ
水底深く沈め
記憶の重い瞼は
水面に横たわり
しずかに見開かれる

清水一美

わたくしは何者か
いずれからしか
息つぐ問いに
浅い眠りのあわい
しろい夢路をたどり

天翔る光儀の
しろい残り香を
あおい闇に溯り
水面をたゆたう
鷺の白によせる

わたくしのしろに
軽やかに舞い立つ
まだ見ぬさきのあおを
おくつきの丹にしずめ
過ぎて帰らぬみには

沈黙が応えとなろう
破ってはいけない

沈黙とはわたくしへの
問いの墳（うごも）りなれば
埋もれるわたくしの

幾すじもの水脈から
問いを吸い上げ
ただいまを水に刻まれた
すぎた呼に澄まし
陵を覆う木々のそら

何かはしれない
しろいうつつは
いにしえあけそめる
淡いみかづきの
すがたにかえし

遠いひかりがさしまねく
ありし日の水底から仰いだ
あおのかがやき
あたらしいよへ生きつぐ
あらたなわたくしへ

受賞の言葉　清水一美

――覚束ない一歩を

蝦夷の裔のわたくしが、なぜ奈良に惹かれるのか。中央集権を強める国の形、それ以上に人々の幸福の形を求める祈りの姿を見たいから。覚束ないながらも、一歩を踏み出す力を忘れないでいたい。詩とはその一歩に他ならない。詩とは、祈りの形であるのだから。

清水一美
しみず　ひとみ
1960 青森県八戸市生
大学入学とともに上京
英文科でジョン・キーツ、日本文学科で堀辰雄をそれぞれ卒論として専攻
文学を志し、アルバイト、フリーの校正者で糊口し、森敦「月山」を追体験すべく八ヶ岳の山小屋で越冬
下山後、某通信会社系列の契約社員となる
奈良と縄文をテーマに詩作を継続中。

潜水

赤澤玉奈

きみの 潤む瞳がくぼみ落ち いくつかの囲いを抜けていく ざわめいて 容量を満たした
体をこぼす スロープに足から たしかにそこにあった輪郭が 頭から体を 通り抜ける

二人組を作ってください
包み込みながら揺蕩うものと温度を合わせても
同じになることはないのだと
委ねることで耳を塞いだ
指先が白く腐食して
水を吸ったところから透明度があがって
（だから君には見えないんですよね）
皮膚がほどける
ナンバリングされた四肢
腕を漕ぐと

透過する血管
深い無音
撥音
口を重ねると、布目のほつれのようにほどかれるのが嫌だった、引っ張られ伸びていく体がいつしか線になって、同じ色の水面をなぞる、口実が実る、なにかを細くつぶやいたとき、そのうち乾いて一つに戻る体のことを思った
全て元通りになる
溶けた体も
瞬く目元も
頭上から合図が降ると
休憩時間が終わって
君が入ってくる
25メートルの背骨をなぞって
言葉の先で頬を撫でる

受賞の言葉

赤澤玉奈

書いていた文章から詩を書くように勧められ、そこから二年ほど、先人や周りの方々から励まされ、厳しく揉まれながら詩を書いてきました。詩を書き始めてから、何かに飛び込んでみる、思い切りが自分の中に生まれたような気がしています。思い入れのある詩と、未来のために挑戦した詩を評価いただき嬉しいです。委員の方々と、指導いただいた先生方、詩を日々読んでくれた友人・知人達に感謝しています。ありがとうございました。

赤澤玉奈
あかざわ　たまな
1996　東京都杉並区生まれ
2020　東京藝術大学絵画科油画専攻卒業
2023　東京藝術大学大学院美術研究科壁画専攻在学中
大学院より恋愛・自身に起こった体調不良などをテーマに詩を制作
インカレサークル早稲田大学詩人会に所属

第19回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

しくじった奴隷

木戸秋波留紀

明日、
わたくしの命は
ないでしょう

——今、暗い部屋の
暗いテーブルの上で
暗い果実酒をすすりながら
これを書いているのです
おそらく
わたくしは殺される
明日、
戸口に笑わない刺客が来て
わたくしの胸を深く刺すでしょう
——あるいは

音の消えた散弾銃が
わたくしの縮んだ頭を
粉々に
吹き飛ばすでしょう
形の残らないほど……
朝、小鳥がさえずり
静けさの中に
汚れた血が飛散する……

……もしかすると
わたくしは
そう、願っていたのかもしれません
「仕方がない」と
誰がつぶやいたのでしょう？
それを聞いて
もしかすると
同じことを
思ったのかもしれません
——打ち止めてくれたなら……

第19回『文芸思潮』現代詩賞
優秀賞

しくじった奴隷

木戸秋波留紀

わたくしには
それが
できなかった
なので明日、
わたくしは殺される
今日は、眠らないでしょう
折角なので
起きていようと……

ギターも壊れ
パンももう、ありません
明日、
戸口にやって来る者は
何を言うのでしょうか？
そして
わたくしは
何と言うのでしょうか？

それとも
何かを言うことすら
許されていなかったと
今更ながら
気付くのでしょうか？

受賞の言葉

優秀賞に選んでいただき、誠にありがとうございます。今後も、作品を作り続けることができればいいと、思っている次第です。

木戸秋波留紀

木戸秋波留紀
きどあき　はるき
2001生まれ
千葉県銚子市出身
和光大学卒
会社員
現在は神奈川県在住

第19回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

五月の雪

遠藤芳子

折れたクレヨンは
それを巻く僅かな紙で
繋がっていた
その紙も千切れて
ガラスの破片より鋭く
身体を貫く
哀しみに似た痛みは
膨らみ続け
突如鋭さを失い
塊となって
血流を拒み
細々と音をたてて
ちらつく
両手足の爪先の暗紫色
まっさらな
美しい死の面を

顔に張り付けて戻ってきた
眠りに落ちる寸前の
……幸せめいて
微笑みに潜む慟哭が
棺の中から溢れだし
心が崩れ落ちる
祈りの場所を間違えたのか
五月に雪が降る
雪よ　蒼く降れ
果てなく蒼く降れ
蒼い炎となり
空を焦がすまでに

山桜の花びらに
五月の雪が降りかかる

受賞の言葉　　遠藤芳子

優秀賞に選んでいただいてありがとうございます。

人の心に届くような作品を目指しています。一歩でも近づきたいと思っていますが、言葉の難しさを痛感しています。闘病中の今の私には、書くことが支えです。選んでいただいた諸先生方に感謝いたします。

遠藤芳子
えんどう　よしこ
1940年生まれ
東京都狛江市在住
「地平線」、「詩都」同人、
「文芸思潮」現代詩賞奨励賞7回
第18回「文芸思潮」現代詩賞優秀賞

第19回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

叫びの木霊が

森下万尋

Mahiro Morishita

耳の螺旋に絡まり
潮騒ふり積もる砂の褥
遠い叫びも
返照の光に鎮められ
ねむる　骨

漆黒の穹をよぎる
記憶の鳥
掌に
羽音の雫がおちる

溶けゆく足跡　それも
多くの時をかけた――

音　あらゆる音が
穹の蒼に吸い込まれ

風紋だけが陽に晒される
言葉のように

光あふれる世界の
時の奔流にのみ込まれ
座礁する小舟
岸辺には
退屈を皺に刻み
夕陽を浴びる老人たち

ゆるゆるとした窓
ふいに差し込む　光
それは　青春のように
さわがしい

森を支える青穹
わたしを手招きする　眼
でも　少年の耳は
どこへ――

受賞の言葉　森下万尋

詩とは何かと大袈裟に問うのも気恥ずかしい歳になりましたが、それでも問い続けることで、このような賞に繋がったと嬉しく思います。それと同時に、自分の模索してきた詩でいいのではないか、と勇気づけられました。また詩を書く時に心がけていることは、言葉から既成の意味を剥がし、新たな姿に生まれ変わらせること、言葉の荒地を耕し、沃野を広げ、そこに種を蒔き、散文の世界に屹立するものを育てることなどです。

森下万尋
もりした　まひろ
1949埼玉県秩父郡生まれ
現在は塾講師
64歳より詩を書き始める
平成29年度小泉八雲賞詩部門優良賞
第15回日本詩歌句随筆評論協会詩部門協会賞
第16回日本詩歌句随筆評論協会詩部門優秀賞
第18回文芸思潮社現代詩佳作
同人誌「回游」に所属
詩集「青い航跡」（2014）
「少年の日を求めて」（2017）
「五十音から湧き出る言葉の泉」（2017）「胡桃の目覚め」（2018）「燃え上がる水」（2019）
その他童話集、随想集など